

北海道における幼児の生活実態調査

札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科准教授	深浦 尚子
札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科教授	品川ひろみ
札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科講師	山内 太郎
札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科准教授	野崎 剛毅

序章 はじめに

北海道の子どもたちは、全国の学力、体力調査において残念ながら厳しい結果となっている。下位である要因としては、例えば、体力調査においては、冬の運動不足、広範囲のため自家用車での移動など地域的な特性が影響していることは明らかである。このように子どもの発達の結果は、どのような環境の中でどのような生活を過ごしているのかを切り離して考えることはできない。また、北海道は札幌市のような大都市、過疎化が進む地方都市、市町村などそれぞれに生活状況が異なる。札幌市のような大都市、地方都市、市町村の子どもたちを北海道の子どもと簡単にひとくくりにはできないのである。

一方で、全国的な子どもの生活調査（たとえば、厚生労働省「21世紀出生縦断調査」、ベネッセ「幼児の生活調査・国内調査」）では、一般的な項目に留まっており、それらの特性を反映するものとはなっていない。また、子育てにおける「育てる—育てられる」という関係を世代から世代へとリサイクルしていると考え、ある意味で人はみな「親から育てられたように育てる」ということになる（鯨岡、2002）ととらえると従来の幼児の生活調査で十分に検討されてこなかった保護者の養育状況についての調査は重要である。同時に保護者の子育てに対する現状や意識、家庭の経済状況、保護者がどのような経験（文化的な経験など）をしてきたかなど、子どもの養育環境を多様な視点で検討する必要があるだろう。

本研究では、以上のような多様な視点を質問項目に反映させると同時に、特に保護者がどのような文化的な経験をしてきたのかということに焦点をあて保護者自身の養育状況についても調査を行った。

本論の構成は、第Ⅰ章では、子どもの発達の様子について、第Ⅱ章では、子育ての現状と意識について、第Ⅲ章では、家庭の状況について、第Ⅳ章では、保護者自身について、第Ⅴ章ではまとめを述べる。

第1節 調査の概要

本調査は北海道内の3歳児の発達の实態と保護者の状況を明らかにするために、「大都市」「地方都市」「町村」の3つの地域比較という観点から対象を設定した。具体的には大都市として札幌市を、地方都市としては苫小牧市を、町村として倶知安・ニセコを調査対象地域とした。札幌市は言うまでもなく北海道の政令指定都市であり、平成27年度国勢

調査によれば人口は 195 万 3,784 人、道内の人口の 36.3%を占めている。苫小牧市は 17 万 2,794 人地域であり道内で 5 番目である。また 15 歳以下の年少人口が平成 28 年 2 月現在 13.15%と地方都市の中では比較的高いと言える。倶知安（15,024 人）・ニセコ（4,962 人）地域は近年、外国人の流入に伴い地域変容が見られる地域である。

本調査ではこれらの地域の自治体および、保育関係団体（札幌市私立保育園連盟、札幌市私立幼稚園連合会）の協力のもとに、3 歳児を持つ子どもの保護者を対象に質問紙調査法で行なった。

札幌市の保育所は、公立 8 園（市立の認定こども園を含む）、私立保育所 10 園（各区）を対象としている。幼稚園は北区・白石区・東区・清田区の園を対象とした。

苫小牧市は公立保育所 6 園、私立保育所 3 園、私立幼稚園 3 園を対象としている。倶知安町は公立保育所 3 園、町内のすべての私立幼稚園 3 園を、ニセコ町は公立の子どもセンター 1 園を対象としている。

回収率は、札幌は 37.9%、苫小牧 38.5%、倶知安・ニセコは 36.6%である。詳細な数については表 0-1 を参照いただきたい。

表 0-1 配布数と回収率

		保育所			幼稚園			合計		
		配布数	回収数	回収率	配布数	回収数	回収率	配布数	回収数	回収率
札幌	公	188	55	29.3	—	—	—	188	55	29.3
	私	213	81	38.0	378	159	42.1	591	240	40.4
	計	401	136	33.9	378	159	42.1	779	295	37.9
苫小牧	公	96	27	28.1	—	—	—	96	27	28.1
	私	60	40	66.7	132	44	33.3	192	84	43.8
	計	156	67	42.9	132	44	33.3	288	111	38.5
倶知安・ニセコ	公	60	12	20.0	—	—	—	60	12	20.0
	私	—	—	—	137	59	43.1	137	59	43.1
	公	60	23	38.3	—	—	—	60	23	38.3
	計	120	35	29.2	137	59	43.1	257	94	36.6

注) 札幌市とニセコ町の認定こども園各 1 園が含まれるが、保育時間の観点から保育所に分類している。

第 I 章 子どもの発達について

本章では、各地域の子どもの発達状況について明らかにすることを目的とする。保育所、幼稚園に在籍する年少時（3 歳から 4 歳）の心身の発達状況について、「乳幼児精神発達診断法 3 才～7 才まで」（津守、磯部、1965）、「幼児期における自己の発達 教師による幼児の行動評定尺度」（柏木、1988）を参照し質問項目を作成した。質問項目は、運動能力、創造性、社会性、情動調整についての計 12 項目であった。調査は、保護者を対象に質問紙で行った。また、大都市、地方都市、町村という地域類型に留意して分析を行った。

第1節 運動能力の発達

運動能力の発達については、片足でけんけんして飛ぶ（表 1-1）、少し高いところから飛び降りる（表 1-2）については、大都市、地方都市、町村部とも9割以上ができるという回答であった。

片足でけんけんする、少し高いところから飛び降りるのは4才までにほとんどの子どもができる項目である。大都市、地方都市、町村部のどの場所においても90%以上の子どもたちができるということであったのは、運動能力において十分に発達していることがうかがえた。地域差に有意な差は確認できなかった。

第2節 創造性の発達

創造性では、積み木やブロックで何かをイメージして遊ぶ（表 1-3）、ままごと遊びをして家庭的な活動をする（表 1-4）では、ほとんどの子どもたちができるという結果であった。この項目も4才までにはほとんどの子どもができるようになる項目である。津守・磯部の調査(1965)では、特に積み木やブロックで何かをイメージして作るのは3才男児が100%でき、女児は56%という結果であった。一方で、おままごとと家庭的な活動をするのは3才から4才女児が90%以上、3才男児が約60%と性差が著しい項目であったが、北海道の子どもたちは、性差に関係なく「できる」という回答が90%を越えていることから創造性が豊かに育っているといえるだろう。また、地域差に有意な差は確認できなかった。

第3節 社会性の発達

社会性の発達については、ままごとで、父、母、赤ちゃんなどの役をそのつもりになって行動する（表 1-5）は、大都市が88.6%、地方都市は82.9%、町村は81.9%であった。この項目は、津守・磯部（1965）の調査においても3才の始めから80%を越えており、その後も一貫して高率を示すという結果と同様であった。しかし、「わからない」という回答をみると、大都市8.4%、地方都市13.5%、町村14.9%であった。地方都市と町村は10%以上の保護者が自分の子どもがままごとあそびのなかで父や母や赤ちゃんなどの役をそのつもりになってあそんでいるかどうか分からないのである。このようなごっこ遊びは、役の社会的役割に関心を持ったり、役を持って他者と交渉したりすることで子どもの社会性の発達を促す重要な遊びである（ヴィゴツキー、2002）。「わからない」ということは、家庭ではままごとなどの遊びが行われていないのか、保護者が子どもの遊びに関心を払っていないのではないかと推測される。社会性の発達についてのもう一つの質問である「幼稚園や保育所であったことを親や周りの人に話をする」（表 1-6）は、ほとんどの子どもたちができており、地域差では有意な差はみられなかった。

第4節 情動調整について

情動調整については、情動の抑制と自己主張の二つの側面がある。この二つの側面がバランスよく発達するのが望ましいとされている。情動の抑制については3つの質問を行った。1つ目は「悲しいこと、くやしいこと、つらいことなどの感情をすぐ爆発させずに抑

えられる」(表 1-7) という質問に対しては、「できる」が大都市 56.8%、地方都市 48.6%、町村 55.3%、全体で 54.7%であった。保護者からみて半数くらいの子どもたちは、衝動的な情動を抑えられる結果であった。3才から4才にかけては、言語発達も進み、ルールを理解ができるようになることで我慢ができるようになってくる年齢の過渡期であることから、我慢ができる子どもとできない子どもが混在する結果と考えられる。地域差には有意差は確認できなかった。

2つ目の「駄目といわれたら、やりたいことでも我慢できる」(表 1-8) という質問では、大都市 72.8%、地方都市 57.3%、町村 68.1%で地域差に有意差が確認できた ($P < 0.05$)。大都市が最も高率で、次に町村、最後に地方都市であった。地方都市は、衝動的な情動の抑制や大人の制止によって我慢するということが困難な子どもが他の地域よりも多い結果となった。

3つ目の「友達に叩かれてもすぐに叩き返さない」では、「できる」と回答したのは大都市 67.0%、地方都市 64.9%、町村 68.5%、全体で 66.8%であった。地域差に有意な差はみられなかった。また、「わからない」という回答も2割以上みられた。家庭以外の友達との様子についての質問だったので、「わからない」という回答が他の質問より多くみられたのだろう。

自己主張についても3つの質問を行った。1つ目の「家庭以外でもいやなことははっきりいやといえる」という質問では、「できる」と回答したのは大都市 59.8%、地方都市 54.5%、町村 50.5%、全体で 56.9%という結果であった。この質問も家庭以外の友達との様子だったので、「わからない」という回答が全体で 29.9%であった。3割近い保護者が家庭以外で子どもが自己主張できているかどうかを知らない(わからない)という結果であった。

2つ目の「してほしいこと、ほしいものははっきり大人に頼める」という質問では、「できる」と回答したのは大都市 82.6%、地方都市 82.0%、町村 77.7%、全体で 81.5%という結果であった。8割以上の子どもはいやなことを自己主張でき、地域差において有意差はみられなかった。

3つ目の「人からうながされなくても行動をおこす」という質問では、「できる」と回答したのは大都市 71.2%、地方都市 62.7%、町村 66.3%、全体で 68.4%という結果であった。地域差では有意差が確認された ($P < 0.05$)。大都市が最も高率で、次が町村、最後に地方都市という結果であった。「できない」という回答が最も多かったのは、地方都市の 21.8%で、「わからない」が最も多かったのは町村の 23.9%であった。

小活

本章では、子どもの発達について運動能力、創造性、社会性、情動調整という4つの側面から検討した。その結果、運動能力、創造性、社会性では、地域差がなく発達していることがうかがえた。しかし、情動調整においては、衝動的な情動の抑制や自己主張の項目で地域における有意な差が確認された。具体的には、地方都市における情動調整について他の地域との差があるということから地方都市の子どもの養育環境、保護者の状況などの詳細な検討が必要である。

表 1-1 片足でけんけんをして遊ぶ

	できる	できない	わからない	実数
大都市	93.6%	3.0%	3.4%	296
地方都市	91.7%	6.4%	1.8%	103
町村	92.6%	6.4%	1.1%	94
平均	93.0%	4.4%	2.6%	499

表 1-2 少し高いところから跳び下りる

	できる	できない	わからない	実数
大都市	99.1%	0%	0%	299
地方都市	98.9%	0.9%	0%	111
町村	98.9%	1.1%	0%	94
平均	99.6%	0.4%	0%	504

表 1-3 積み木やブロックでイメージして遊ぶ

	できる	できない	わからない	実数
大都市	99.3%	0%	0.7%	299
地方都市	99.1%	0.9%	0%	111
町村	98.9%	1.1%	0%	94
平均	99.2%	0.4%	0.4%	504

表 1-4 ままごと遊びで家庭的な活動をする

	できる	できない	わからない	実数
大都市	97.5%	1.0%	2.05	299
地方都市	95.5%	0.9%	3.6%	111
町村	96.8%	1.1%	2.1%	94
平均	96.6%	1.0%	2.4%	504

表 1-5 ままごとで役のつもりになって行動する

	できる	できない	わからない	実数
大都市	88.6%	3.0%	8.4%	298
地方都市	82.9%	3.6%	13.5%	111
町村	81.9%	3.2%	14.9%	94
平均	86.1%	3.2%	10.7%	504

表 1-6 幼稚園や保育園であったことを周りに話す

	できる	できない	わからない	実数
大都市	98.0%	1.7%	0.3%	298
地方都市	98.2%	1.8%	0%	111
町村	95.7%	3.2%	1.1%	94
平均	97.6%	2.0%	0.4%	504

表 1-7 感情を爆発させずに抑えられる

	できる	できない	わからない	実数
大都市	56.8%	32.1%	11.1%	296
地方都市	48.6%	40.4%	11.0%	109
町村	55.3%	31.9%	12.8%	94
平均	54.7%	33.9%	11.4%	499

表 1-8 駄目といわれたら我慢できる

	できる	できない	わからない	実数
大都市	72.8%	17.3%	9.9%	294
地方都市	57.3%	29.1%	13.6%	110
町村	68.1%	23.1%	8.8%	91
平均	68.5%	21.0%	10.5%	495

表 1-9 叩かれてもすぐに叩き返さない

	できる	できない	わからない	実数
大都市	67.0%	11.8%	21.2%	297
地方都市	64.9%	12.6%	22.5%	111
町村	68.5%	6.5%	25.0%	92
平均	66.8%	11.0%	22.2%	500

表 1-10 家以外でも嫌なことは嫌といえる

	できる	できない	わからない	実数
大都市	59.8%	12.8%	27.4%	296
地方都市	54.5%	12.7%	32.7%	110
町村	50.5%	15.1%	34.4%	93
平均	56.9%	13.2%	29.9%	499

表 1-11 してほしいことをはっきり大人にいえる

	できる	できない	わからない	実数
大都市	82.6%	8.7%	8.7%	298
地方都市	82.0%	8.1%	9.9%	111
町村	77.7%	12.8%	9.6%	94
平均	81.5%	9.3%	9.1%	502

表 1-12 促されなくても行動を起こす

	できる	できない	わからない	実数
大都市	71.2%	15.9%	12.9%	295
地方都市	62.7%	21.8%	15.5%	110
町村	66.3%	9.8%	23.9%	92
平均	68.4%	16.1%	15.5%	497

第Ⅱ章 子育ての現状と意識

本章では保護者の子育てに対する実態と親としての意識について明らかにする。子どもに対してどのような期待を持ち、どのような子育てをしているのか。また子育てをどのように評価しているのかについて、全体の結果とともに、「大都市」「地方都市」「町村部」の地域類型に留意して分析をすすめる。

第1節 子育ての期待と現状

はじめに3歳児を持つ保護者たちが、子どもに対してどのような期待を持ち子育てしているのかについて確認していこう。現在では親が子どもに対して過剰な期待を抱いたり、それとは逆に関心を持たなかったりすることが子育ての課題の一つとなっている。本調査では子どもへの期待を測る設問として「①子どもには将来このようになってほしいという理想がある」「②子どもの可能性をできるだけ伸ばしたい」という項目を用意した。これらについて「よく考える」「時々考える」「あまり考えない」「考えたことがない」という選択肢で答えてもらった。「子どもには将来このようになってほしいという理想がある」については、「よく考える」が18.7%、「時々考える」が61.7%とおおよそ8割が子どもへの理想を抱いていることがわかる。一方で「あまり考えない」「考えたことがない」とする者は合わせて19.7%であった。

つぎに「子どもの可能性をできるだけ伸ばしたい」は、「よく考える」は54.4%、「時々考える」43.3%とほとんどの保護者がわが子の可能性を伸ばしたいと考えており、「あまり考えない」はごくわずかである。

これら子どもへの期待について、地域別の結果に目をやると、子どもへの理想を持っているか否かについては地域による差はごくわずかである。子どもの可能性を伸ばしたいと考えるかについては、多少の違いが確認できるが有意な差は確認できなかった。

第2節 子育ての現状

保護者たちは子育てに対して期待を持っていることが確認された。では実際にはどのような現状なのだろうか。子育ての現状を知るための設問として「③絵本を読み聞かせる」「④子どもの好きな歌を一緒にうたう」「⑤子どものお気に入りのDVDやテレビを見せる」という項目と、しつけの現状を知るための「⑥ダメなことはダメとしっかり伝えている」「⑦子どもを大きな声で叱るときがある」、子どもを保護するための「⑧道路や駐車場を歩くときは子どもの手をしっかり握っている」「⑨食事はバランスや栄養などに配慮して用意する」を用意した。

まず子どもに対しての働きかけである絵本の読み聞かせは、「よくある」が48.7%、「時々ある」が41.3%と9割近くが絵本の読み聞かせをしていることがわかる。歌はどうだろうか。「よくある」は60.6%、「時々ある」が32.8%と絵本以上に多い結果である。しかしこの3項目の中でもっとも多かったのは「子どものお気に入りのDVDやテレビを見せる」であった。「よくある」は73.4%、「時々ある」が24.2%と98%以上がテレビやDVDを見せていることがわかる。

またこれらの結果を地域別比較という観点で見ると、テレビやDVDを見せるという項目は地域による違いはほとんどないが、子どもと一緒に歌をうたうは町村部と大都市部で多いなど多少の違いが見られ、絵本を読み聞かせるについては、「よくある」が町村部で67.0%、大都市部47.0%、地方都市37.6%と有意な差が見られた（ $P<0.01$ ）。

しつけの現状についてはどうだろうか。「子どもにダメなことはダメとしっかり伝えている」については、「あまりない」「ない」と答えた人はいなかった。「よくある」は94.8%、「時々ある」は5.2%とほとんどの人が子どもに対して、しっかりと伝えていることがわかる。また「子どもを大きな声で叱るときがある」については、「よくある」が38.4%、「時々ある」53.2%、「あまりない」8.2%、「ない」0.2%と時には大きな声で叱ることがあるようだ。これら2つの設問について地域差を確認すると、多少の違いは見られるが有意な差までは確認できない。

子どもの安全や健康を守ることについてはどうだろうか。「道路や駐車場を歩くときは子どもの手をしっかり握っている」については、「いつもしている」79.8%、「時々している」19.2%とほとんどの保護者が、子どもの安全に配慮していると言える。

また「食事はバランスや栄養などに配慮して用意する」については、「いつもしている」が53.3%、「時々している」41.2%、と安全ほどではないが9割以上が子どもの栄養を考え用意していることがわかる。

これらの設問についての地域差も多少の違いは見られるが、有意な差までは確認されなかった。

第3節 親としての意識や不安

保護者がどのように子育てを考えているのだろうか。それらを測る項目として、「⑩予定をたてる時は子どもを優先する」「⑪子どもの園生活について関心をもっている」「⑫自分の子どもとほかの子どもを比較することがある」「⑬自分の子どもの発達は順調だと思う」「⑭自分の子どもを可愛いと感じることがある」という5つの設問と、子育てについての不安について「⑮子どもが駄々をこねてどうしていいかわからない時がある」「⑯子どもの行動で理解できないことがある」「⑰子育てをしていてイライラすることがある」「⑱時々子育てが嫌になることがある」という4つの設問を用意した。

まず予定をたてる時は子どもを優先するかという設問について「いつもしている」は68.7%、「時々している」29.0%と9割以上が子どもを優先していることがわかる。子どもの園生活への関心については、「とても関心がある」は61.2%、「まあ関心がある」37.4%、とほとんどが関心をもっている。またわが子をほかの子どもと比較することがあるかについては、「よくある」はわずか7%、「時々ある」50.9%と、「よくある」、「時々ある」を合わせても半数程度であり、「あまりない」35.4%、「ない」6.8%と半数近くの保護者はわが子と他の子どもを比較することはないと答えている。また自分の子どもの発達は順調だと思うという設問については、「順調だと思う」58.1%、「だいたいそう思う」35.9%と、9割以上が子どもは順調に育っていると考えている。さらに自分の子どもが可愛いと感じるについては、「よく感じる」が92.9%であり子どもへの愛情が確認できる。一方で「感じない」との答えはなかったが、「あまり感じない」は0.2%確認された。これだけを見ると子育てに対してネガティブな意識は見られないが、それについてたずねたところ、「子ども

が駄々をこねてどうしていいかわからない時がある」は、「よくある」が 9.0%、「時々ある」43.4%であった。「子どもの行動で理解できないことがある」についても、「よくある」6.6%、「時々ある」45.5%と合わせて半数程度の保護者が子どもの行動で戸惑いを感じるなど、多くの親が子育ての難しさを感じている。それと関連して、「子育てをされていてイライラすることがある」は、「よくある」29.6%、「時々ある」58.3%と9割近くが子育てに対してネガティブな意識を経験している。しかし「時々子育てが嫌になることがある」気持ちになったことがある人は「よくなる」4.0%、「時々なる」31.5%であり3割以上が子育てが嫌になるという経験をしているもののイライラしたことがある比率よりは低い結果となっている。

これらの意識について地域差を見ると、「子育てをされていてイライラすることがある」という項目については有意な差が見られた ($P < 0.03$)。もっとも「よくある」は町村部で37.2%、大都市で28.1%、地方都市27.0%と町村部で「よくある」と答えた人が多かった。これ以外の項目について有意な差は確認できなかった。

第4節 自分自身と親としてのバランス

子どもは可愛いと感じるものの、時にはイライラすることもあるという現状を確認した。自分だけの生活を考えればよい生活と、親として子どもを育てなければならない生活では、大きく異なる。それら一人の人間としての自分と親としての自分をどの様なバランスで捉えているのだろうか。また、親として自分自身をどう評価しているのだろうか。それらを測る設問として「①⑨子育てのために自分の自由が制限されていると感じることがある」②⑩自分には1人の人間としてやりたいことがある」「②⑩子育てをすることで自分が人間として成長していると感じることがある」「②⑩自分は親として頑張っていると思うことがある」という4つを用意した。

「子育てのために自分の自由が制限されていると感じることがある」は「よく思う」は19.9%、「時々そう思う」53.2%と7割以上の方が自分の時間を制限されていると感じていた。「あまり思わない」「思わない」は3割に満たない結果である。それに関連して「自分には1人の人間としてやりたいことがある」について「よく思う」18.7%、「時々そう思う」43.5%、とやはり7割以上が親としてだけではなく1人の人間としてやりたいことがあるという意識をもっている。一方で「子育てをすることで自分が人間として成長していると感じることがある」について「よく感じる」は31.7%、「時々感じる」45.8%、8割近くが子育てを通して成長していると考えている。だが「自分は親として頑張っていると思うことがある」と親としてと限定すると「よく思う」21.8%、「時々そう思う」50.4%と7割程度と多少低くなる。

これらの項目について地域差に着目すると、「子育てのために自分の自由が制限されていると感じることがある」($P < 0.01$)については有意な差がみられ、町村部で高く、地方都市部で低かった。「自分には1人の人間としてやりたいことがある」「自分は親として頑張っていると思うことがある」「子育てをすることで自分が成長していると感じることがある」という3項目については多少の違いはあるが有意な差は見られなかった。

小括

本章では親としての実情と意識について確認してきた。これまでの分析をまとめると以下のようなことが言える。一つ目として、保護者たちは子どもには関心を持ち子どもへの

しつけについても期待を持ち取り組んでいる。二つ目として自分自身のやりたいこともあることや、子どもにイライラを感じることも多いが、子どもは可愛いと感じている。これらのことから、予想以上に子育てに前向きに取り組んでいる様子が見られ、社会全般に見られる子育て力や意識が低いのではないかという不安とは必ずしも重ならない。

また、地域差という観点では、ほとんどの項目で差は確認されなかったが、「絵本読み聞かせる」「子育てのために自分の自由が制限される」「イライラすることがある」の3項目は、すべて町村部で高く、ニセコ、倶知安地域の社会資源の影響があると提案された。

表 2-1 子育ての意識と現状

		よく	時々	あまり	ない	実数		よく	時々	あまり	ない	実数
大都市	①子どもへの理想める	18.1%	63.9%	17.4%	0.7%	299	②可能性を伸ばしたい	57.5%	40.8%	1.3%	0.3%	299
地方都市		19.8%	59.5%	19.8%	0.9%	111		51.4%	45.9%	2.7%	0.05%	111
町村部		19.1%	57.4%	21.3%	2.1%	94		47.9%	47.9%	3.2%	1.1%	94
平均度数		18.7%	61.7%	18.7%	1.0%	504		54.4%	43.3%	2.0%	0.4%	504
大都市	③絵本を読む機会を	47.0%	44.3%	8.7%	0.0%	298	④歌を一緒に聴かせる	60.4%	33.9%	5.4%	0.3%	298
地方都市		37.6%	43.1%	19.3%	0.0%	109		57.7%	36.0%	6.3%	0.0%	111
町村部		67.0%	29.8%	3.2%	0.0%	94		64.9%	25.5%	9.6%	0.0%	94
平均度数		48.7%	41.3%	10.0%	0.0%	501		60.6%	32.8%	6.40%	0.2%	503
大都市	⑤DVDなどを見せる	71.6%	25.4%	2.3%	0.7%	299	⑥ダメなことしつかり	95.7%	4.3%	0.0%	0.0%	299
地方都市		79.3%	18.9%	0.9%	0.9%	111		90.9%	9.1%	0.0%	0.0%	110
町村部		72.3%	26.6%	1.1%	0.0%	94		96.8%	3.2%	0.0%	0.0%	94
平均度数		73.4%	24.2%	1.8%	0.6%	504		94.8%	5.2%	0.0%	0.0%	503
大都市	⑦大きな声で叱る	39.1%	52.5%	8.1%	0.3%	297	⑧道路では手を握る	78.8%	20.2%	1.0%	0.0%	297
地方都市		33.3%	60.4%	6.3%	0.0%	111		85.6%	12.6%	1.8%	0.0%	111
町村部		42.6%	46.8%	10.6%	0.0%	94		76.3%	23.7%	0.0%	0.0%	93
平均度数		38.4%	53.2%	8.2%	0.2%	502		79.8%	19.2%	1.0%	0.0%	501
大都市	⑨食事のバランス配慮	52.5%	41.8%	5.4%	0.3%	299	⑩予定は子ども優先	67.9%	29.4%	2.3%	0.3%	299
地方都市		46.4%	45.5%	7.3%	0.9%	110		67.6%	29.7%	2.7%	0.0%	111
町村部		63.8%	34.0%	2.1%	0.0%	94		72.3%	26.6%	1.1%	0.0%	94
平均度数		53.3%	41.2%	5.2%	0.4%	503		68.7%	29.0%	2.2%	0.2%	504
大都市	⑪園生活に関心あり	62.1%	36.9%	0.7%	0.3%	298	⑫他の子どもと比較	7.0%	54.2%	32.4%	6.4%	299
地方都市		59.5%	38.7%	1.8%	0.0%	111		4.5%	47.3%	40.9%	7.3%	110
町村部		60.6%	37.2%	2.1%	0.0%	94		9.6%	44.7%	38.3%	7.4%	94
平均度数		61.2%	37.4%	1.2%	0.2%	503		7.0%	50.9%	35.4%	6.8%	503
大都市	⑬発達に順調に思っている	58.6%	34.3%	5.1%	2.0%	297	⑭自分の子ども可愛い	94.0%	6.0%	0.0%	0.0%	299
地方都市		55.5%	40.0%	3.6%	0.9%	110		91.0%	8.1%	0.9%	0.0%	111
町村部		59.6%	36.2%	1.1%	3.2%	94		91.5%	8.5%	0.0%	0.0%	94
平均度数		58.1%	35.9%	4.0%	2.0%	501		92.9%	6.9%	0.2%	0.0%	504
大都市	⑮駄々をねてわがまま	10.0%	43.8%	37.8%	8.4%	299	⑯行動理解できかない	7.4%	46.8%	40.7%	5.1%	297
地方都市		6.4%	41.3%	38.5%	13.8%	109		6.3%	40.5%	43.2%	9.9%	111
町村部		8.5%	44.7%	38.3%	8.5%	94		4.3%	46.8%	42.6%	6.4%	94
平均度数		9.0%	43.4%	38.0%	9.6%	502		6.6%	45.4%	41.6%	6.4%	502
大都市	⑰イライラしたとき	28.1%	62.5%	9.0%	0.3%	299	⑱子育て嫌いなとき	3.7%	31.6%	43.4%	21.2%	297
地方都市		27.0%	53.2%	18.0%	1.8%	111		2.7%	29.7%	38.7%	28.8%	111
町村部		37.2%	51.1%	9.6%	2.1%	94		6.4%	33.0%	39.4%	21.3%	94
平均度数		29.6%	58.3%	11.1%	1.0%	504		4.0%	31.5%	41.6%	22.9%	502
大都市	⑲自由制限されている	18.5%	59.1%	19.8%	2.7%	298	⑳やりたいことがある	19.7%	45.5%	29.1%	5.7%	299
地方都市		13.6%	44.5%	30.0%	11.8%	110		11.7%	39.6%	36.0%	12.6%	111
町村部		31.9%	44.7%	19.1%	4.3%	94		23.4%	41.5%	26.6%	8.5%	94
平均度数		19.9%	53.2%	21.9%	5.0%	502		18.7%	43.5%	30.2%	7.7%	504
大都市	㉑人間として成長	33.4%	45.5%	20.1%	1.0%	299	㉒親としての目配り	23.1%	51.8%	23.1%	2.0%	299
地方都市		25.5%	45.5%	25.5%	3.6%	110		16.2%	46.8%	32.4%	4.5%	111
町村部		33.3%	47.3%	18.3%	1.1%	93		24.5%	50.0%	23.4%	2.1%	94
平均度数		31.7%	45.8%	20.9%	1.6%	502		21.8%	50.4%	25.2%	2.6%	504

第三章 家庭生活の状況と暮らしに対する意識

本章では子どもが過ごしている家庭生活の状況について見ていく。言うまでもなく子どもの育ちは家庭生活の状況に大きく影響される。したがって「北海道における幼児の生活実態の把握」という研究全体のテーマを念頭に置けば、子どもがどのような家庭で日々過ごしているのかを明らかにしていくことは重要であろう。とはいえ家庭生活の状況と一言で言ってもそれが意味する内容は非常に広く、その全般について取り上げることはできない。さしあたってここでは具体的な状況把握に加えて保護者が自身の家庭の状況をどのように捉えているか明らかにすることを目的としたい。そのためこの調査では、レジャーや旅行など外出する機会の頻度、誕生日やクリスマス、正月などの年間行事の過ごし方といった余暇活動の様子に着目した。なぜなら、家庭生活の実際は保護者の文化的な価値観がしばしば反映されるものであるが、それが一番反映されやすいものの一つとして余暇活動が挙げられると考えたためである。また、家庭生活は同時にそれぞれの家庭の経済状況など社会的側面に規定されてもいる。そこで本章では保護者自身が現在の家庭の暮らし向きに対してどのような意識を持っているかについても取り上げることとした。これらの分析について大都市、地方都市、町村部に分類して検討した。

第1節 外出する機会の頻度

表 3-1 では、この1か月で車や公共交通機関を使って子どもと日帰りで遊びに行った回数について聞いている。「車や公共交通機関を使う」という文言が入っているのは、出かける準備がある程度必要な外出の頻度が聞きたかったためである。もちろんそれは、どこに何があるかといったそれぞれの家族が住む地理的環境によって変わってくるものであろうが、いずれにせよ子どもにとって家族で遊びに行ったという経験は楽しい思い出として記憶されるに違いない。また、「家族で遊びに行く」ということは家族員相互の親密度を示すとも言え、その頻度の多さは家庭生活の安定度を示すものと考えられる。

表 3-1 を見ると大都市と地方都市では「月 3~4 回」が最も多くそれぞれ 34.6%、35.5% であり、町村部では「月に 1~2 回」が 39.4% と最も多かった。回数については若干の違いはあるもののそこに明確な地域差は見られなかった。ただし、そうした中で遊びに行った回数が「なし」と答えたケースが一定数いたことには留意が必要である。これは家庭での楽しい時間を送る余裕のない家庭、あるいはそうした経験が乏しい子どもの存在を示唆する。大都市で 6.4%、地方都市で 9.1%、町村部で 14.9% となっており、都市の規模が小さくなるにつれて割合が増えている。

同様の視点で「この1年間で宿泊をとまなう観光旅行に行った回数」(表 3-2) を見てみよう。大都市、地方都市、町村部のそれぞれで傾向が異なっている。大都市では「2 回」と「なし」がそれぞれ 26.8% と同率で最も多く、地方都市では「2 回」と「1 回」が 30.6% で最も多かった。一方町村部では「1 回」が 34.4% と最も高くなっているが、「3 回~」も 28.7% と高い数値を示している。とはいえこれらの数字から全体的に見て地域間で明確な差があるとまでは言えないだろう。

次に「1 か月平均で子どもと一緒に外食する回数」(表 3-3) はどうであろうか。調査結

果を見ると町村部において回数が少ない傾向にあったが、どの地域でも「1～2回」が過半数であり、明確な地域差は見られなかった。

表 3-1 この1か月で車や公共交通機関を使って子どもと日帰りで遊びに行った回数

	5回～	3～4回	1～2回	なし	実数
大都市	26.8%	34.6%	32.2%	6.4%	298
地方都市	20.9%	35.5%	34.5%	9.1%	110
町村部	17.0%	28.7%	39.4%	14.9%	94
平均度数	23.7%	33.7%	34.1%	8.6%	502

表 3-2 この1年間で子どもと宿泊の観光旅行に行った回数

	3回～	2回	1回	なし	実数
大都市	23.7%	26.8%	22.7%	26.8%	295
地方都市	14.4%	30.6%	30.6%	24.3%	111
町村部	28.7%	19.1%	34.0%	18.1%	94
平均度数	22.6%	26.2%	26.6%	24.6%	500

ところで大都市と地方都市では月平均の外食の回数が「5回～」との回答がそれぞれ10%前後見られた。これはひと月のうち週に2回以上外食する週があることになる。筆者は調査票の設計の段階では外食の機会を「日帰りの遊び」と同様に家庭生活の中の楽しいイベントとして捉えていた。しかし頻繁に外食がされているということは、家庭生活の余裕のなさの裏返しとして現れている可能性もある。ここでは深入りできないが、こうした視点で検討していく必要もあろう。

さて、次の「この半年間で子どもと親戚や祖父母の家に行った回数」(表 3-4) では明確な地域差が確認できた。各地域とも「5回～」という回答が最も多かったが、その中で特に注目すべきは町村部における回数の少なさである。「なし」が10.6%、「1～2回」が25.5%となっておりと大都市や地方都市に比べてその割合が大きい。親戚や祖父母との交流はその家庭の持つ社会的なネットワークの一つととらえることができる。より具体的に言えば、子育てをしている多くの家庭は、親戚や祖父母に子育てや家庭生活を援助してもらっていることが推測できるだろう。この調査結果は町村部にはそういった援助を受けていない層が一定数いる可能性を示唆する。

表 3-3 1か月平均で子どもと一緒に外食する回数

	5回～	3～4回	1～2回	なし	実数
大都市	9.0%	27.1%	56.5%	7.4%	299
地方都市	11.8%	23.6%	55.5%	9.1%	110
町村部	4.3%	18.1%	66.0%	11.7%	94
平均度数	8.7%	24.7%	58.1%	8.5%	503

表 3-4 この半年間で子どもと親戚や祖父母の家に行った回数

	5回～	3～4回	1～2回	なし	実数
大都市	61.8%	17.9%	15.2%	5.1%	296
地方都市	69.4%	15.3%	12.6%	2.7%	111
町村部	55.3%	8.5%	25.5%	10.6%	94
平均度数	62.3%	15.6%	16.6%	5.6%	501

第2節 子どもとの年間行事・イベントの過ごし方について

子どもにとって家族と外出する機会が楽しい経験として記憶されるように、誕生日やクリスマスなどのイベントをどのように過ごすかということも子どもの育ちに大きな影響を

持つだろう。「子どもの誕生日やクリスマスにプレゼントをあげるか」（表 3-5）について聞いたところ、町村部で若干低い割合となったものの、「必ずあげる」という回答がすべての地域で 80%以上となった。また、「クリスマスやお正月に特別な食事を用意するか」（表 3-6）でも「必ずする」「大体する」を合わせるとどの地域でも 90%以上の保護者が用意すると答えている。このように子どもが楽しみにしている年間行事に対して保護者がどう振る舞うかということについては、地域間での差はほとんど見られない。

しかしそういった年間行事を誰と過ごすかということになると大きな違いが出てくるようである。「お盆やお正月に親戚や祖父母と過ごすか」（表 3-7）という質問に対する回答を見ると大都市で 62.2%、地方として 71.2%が「必ず過ごす」と答えているのに対して、町村部においては 43.6%と半数にも満たなかった。また、「過ごしたことがない」という回答が 8.5%、「あまり過ごさない」が 19.1%となっており、大都市や地方都市のそれと比較してもかなり大きな割合になっている。前節でも見たが、町村部において親戚や祖父母との関係が希薄と思われるケースがここでも見いだされる。

表 3-5 子どもの誕生日やクリスマスにプレゼントをあげるか

	必ずあげる	大体あげる	あまりあげない	実数
大都市	89.6%	9.1%	1.3%	297
地方都市	87.4%	11.7%	0.9%	111
町村部	80.9%	12.8%	6.4%	94
平均度数	87.5%	10.4%	2.2%	502

表 3-6 クリスマスやお正月に特別な食事を用意するか

	必ずする	大体する	あまりしない	実数
大都市	79.3%	19.4%	1.3%	299
地方都市	80.2%	18.9%	0.9%	111
町村部	67.0%	26.6%	6.4%	94
平均度数	77.2%	20.6%	2.2%	504

表 3-7 お盆やお正月に親戚や祖父母と過ごすか

	必ず過ごす	だいたい過ごす	あまり過ごさない	過ごしたことがない	実数
大都市	62.2%	28.1%	6.0%	3.7%	299
地方都市	71.2%	20.7%	6.3%	1.8%	111
町村部	43.6%	28.7%	19.1%	8.5%	94
平均度数	60.7%	26.6%	8.5%	4.2%	504

ただし、もしそうであるなら「困ったときに頼りにしたり相談したりできる人はいるか」（表 3-8）という質問に対して、町村部では親戚関係が挙がる割合は低くなるのが予想できるだろう。しかし「自分の親」「配偶者の親」「自分のきょうだい」「その他の親戚」の割合について地域間で有意な差は認められなかった。もっとも、町村部の回答を見ると、親戚関係以外にも相談する選択肢が多いのかもしれない。町村部では大都市や地方都市と比較しても、「ママ友・パパ友」が 66.0%と高い。その他にも「保育園や幼稚園の先生」「公的機関の相談員や専門家」も比較的高い割合を示している。

表 3-8 困ったときに頼りにしたり相談したりできる人はいるか

	配偶者	自分の親	配偶者の親	自分のきょうだい	その他の親戚	近所の人	学生時代の友人	保育園や幼稚園の先生	ママ友・パパ友	専門家	ネットで知りあった人	その他	いない	実数
大都市	82.3	82.3	29.1	40.1	10.0	8.4	33.4	30.1	49.5	2.7	1.3	6.0	1.0	299
地方都市	70.3	84.7	38.7	45.0	7.2	7.2	42.3	28.8	48.6	2.7	1.8	11.7	0.0	111
町村部	89.4	75.5	29.8	38.3	5.3	7.4	34.0	38.3	66.0	7.4	.0	5.3	0.0	94
平均度数	81.0	81.5	31.3	40.9	8.5	7.9	35.5	31.3	52.4	3.6	1.2	7.1	0.6	504

第 3 節 現在の家庭生活に対する意識

最後に、暮らし向きに対する意識と生活上の不足と感じていることや負担に感じていることについて、主に金銭的な側面から見ていこう。

表 3-9 は、ご家庭の現在の生活は次のどれに当てはまると感じますかという質問に対する回答である。これを見ると「大変ゆとりがある」の割合が町村部で、「大変苦しい」の割合が地方都市でそれぞれ若干大きくなっている。特に地方都市において「やや苦しい」「大変苦しい」と回答した割合を合計すると 27.9%とおよそ 3 割弱になっている点は留意が必要である。とはいえ表全体を眺めてみると地域ごとの偏りはほとんど見られず、各項目とも三地域でほぼ同じ程度の割合で分布している。

表 3-9 現在の家庭の暮らし向きに対する意識

	大変ゆとりがある	ややゆとりがある	普通	やや苦しい	大変苦しい	実数
大都市	4.3%	19.7%	52.2%	21.1%	2.7%	299
地方都市	4.5%	13.5%	54.1%	18.9%	9.0%	111
町村部	8.5%	16.0%	56.4%	16.0%	3.2%	94
平均度数	5.2%	17.7%	53.4%	19.6%	4.2%	504

しかし具体的に生活上で何が不足しているかを聞いてみると、町村部での回答が他の地域と比較して大きく異なっていることが分かる。表 3-10 を見てみると、まず「特になし」という回答の割合が 40.4%となっており、非常に特徴的である。また「突然の出費に備えた貯金」が不足しているとの回答も、大都市で 46.2%、地方都市で 49.5%であるのに対して町村部ではわずか 27.7%となっている。他の項目で大都市や地方都市の数値を大きく上回っているところはないため、町村部では生活上の不足を感じることも他地域よりも少ないのかもしれない。

表 3-10 毎日の生活で不足していると感じること

	毎日の生活費	病院に行くお金	親の交際費	子供の教育費	旅行やレジャー資金	突然の出費に備えた貯金	託児費用(シッター代)	特になし	実数
大都市	14.4%	6.0%	21.4%	30.1%	46.2%	46.2%	3.3%	30.4%	299
地方都市	19.8%	9.0%	17.1%	24.3%	40.5%	49.5%	5.4%	27.9%	111
町村部	12.8%	1.1%	16.0%	18.1%	43.6%	27.7%	6.4%	40.4%	94
平均度数	15.3%	5.8%	19.4%	26.6%	44.4%	43.5%	4.4%	31.7%	504

表 3-11 は子育て費用の負担感について聞いたものである。「習い事にかかる費用」はどの地域においても一番負担が大きいと感じる項目となっているが、それ以外については、表 3-10 と同じように町村部における回答が他の地域と比較して負担であると回答した割合が少ない傾向にある。例えば「食費」や「おもちゃ」、「絵本」は他地域の半分にも満たない数値であった。

表 3-11 子育ての費用について、負担が大きいと感じるもの

	食費	洋服代	おむつなど衛生用品	おもちゃ	絵本	光熱水費	子育てに関する本	レジャー	習い事にかかる費用	託児費用	その他	負担感はない	実数
大都市	25.1	26.8	17.1	13.4	2.3	19.7	0.7	26.4	42.5	20.4	6.7	14.0	299
地方都市	25.2	25.2	14.4	13.5	3.6	20.7	0.0	18.9	27.9	27.0	1.8	19.8	111
町村部	12.8	17.0	19.1	4.3	0.0	13.8	0.0	20.2	35.1	26.6	9.6	28.7	94
平均度数	22.8	24.6	16.9	11.7	2.2	18.8	0.4	23.6	37.9	23.0	6.2	18.1	504

小括

本稿では子育て家庭の状況把握と保護者が自身の家庭の状況をどのように捉えているか明らかにすることを目的とした。状況把握として、レジャーや旅行の回数については地域間で明確な差はみられなかったが、親せきや祖父母との交流の頻度については町村部において他地域との違いが見られた。また、保護者の意識として、家庭生活や子育てに対する金銭的な不足や負担感が町村部において少なかったことが明らかになった。ただし、これらの調査結果はあくまで調査対象者の主観である点に注意しなければならないだろう。ここでより重要であるのは、保護者自身が具体的にどのような生活に対してそれを感じているかということである。今回は検討できなかったが、そのためにはそれぞれの家庭を例えば年収ベースで分類してみたときに地域間でどのような違いが出てくるかを見ていく必要がある。

第IV章 保育家庭の社会的・文化的背景

近年、日本社会における貧困や格差が問題とされている。その際、大きな問題となるのは、格差が固定化し、生まれによって階層が事実上決まってしまうこと、つまり、階層の再生産構造が確立してしまうことである。

階層の再生産が問題となる時、そのメカニズムには大きく2つの見方がある。ひとつは、家庭の経済力の差によって、学習塾や家庭教師などへの投資力が変わってくるために学歴の差が生じるというもので、学校外投資仮説、もしくは経済的再生産論と呼ばれる。もうひとつは、家庭の文化的背景の違いが学歴の獲得や就職後の出世等に影響を与えるという考え方で、文化的再生産論と呼ばれる。この両者は互いに関連し合う部分もあるものの、それぞれ独立して階層形成に影響を与えるとされている。

本章では、幼児教育・保育がその後の社会的地位形成へ影響を与えることに鑑み、保護者の経済的、社会的、文化的な背景を確認する。その際、大都市と地方都市、町村部との比較もおこなう。なお、調査項目については、SSM調査の項目を参考とした。

第1節 「客体化された文化資本」

保護者自身が育った環境と、現在の環境とをするために、20のものについて家にあったかどうかを聞いた。15歳の頃、自宅にあったものを確認すると、そこに地域差はあまり見られない。対象者の多くは20代、30代、40代であり、15歳の頃といっても10年～20年ほど前であるため、風呂やテレビ、ビデオデッキ、冷蔵庫、電子レンジ、電話といったものはほぼ全員が所有している。また、持ち家である者が大都市で78.7、地方都市でも70.4と高く、またその持ち家率の高さからか学習机や子供部屋もほとんどの人が持っていた。所有率が低かったのは美術品・骨董品、クーラー・エアコン、パソコン・ワープロ、携帯電話・PHS、田畑などである。

一方、現時点ではほとんどのものにおいて、所有率が15歳時よりも下がっている。大幅に増えているのは携帯電話・PHS（大都市で25.7→99.3）、パソコン・ワープロ（大都市で42.4→93.6）くらいである。一方、子供部屋や学習机は、まだ3歳児であるという年齢上の問題もあってか、それぞれ大幅に所有率が減っている。客体的な文化資本として多く取り上げられるピアノ（大都市で46.0→29.0）や文学全集・図鑑（大都市で65.9→39.8）、美術品・骨董品（大都市で19.0→9.3）なども、軒並み所有率が下がっている。

表4-2では本をどのくらい持っていたか、持っているかを聞いている。最頻値は15歳の頃、現在とも「26～100冊」である。各カテゴリーの中央値を代表値として平均冊数を計算すると、15歳の頃は73.2冊、現在は72.6冊と、ほとんど差は生じなかった。なお、地域別でみると、大都市の平均冊数が15歳時76.4冊、現在77.0冊、町村部が15歳時75.3冊、現在76.3冊であるのに対し、地方都市では15歳時で62.9冊、現在で50.5冊と大きく差が生じている。

表 4-1 所有物

		15歳				現在			
		○	×	?	N	○	×	?	N
1.持ち家	大都市	78.7%	21.3%	0.0%	296	67.1%	32.9%	0.0%	295
	地方都市	70.4%	29.6%	0.0%	108	54.7%	45.3%	0.0%	106
	町村部	76.3%	23.7%	0.0%	93	53.3%	46.7%	0.0%	92
2.田畑	大都市	35.1%	64.9%	0.0%	291	18.9%	80.4%	0.7%	285
	地方都市	30.8%	69.2%	0.0%	107	17.3%	82.7%	0.0%	104
	町村部	31.2%	68.8%	0.0%	93	31.9%	67.0%	1.1%	91
3.風呂	大都市	98.0%	2.0%	0.0%	298	99.7%	0.3%	0.0%	298
	地方都市	98.2%	1.8%	0.0%	110	98.2%	1.8%	0.0%	111
	町村部	100.0%	0.0%	0.0%	93	98.9%	1.1%	0.0%	93
4.子供部屋	大都市	95.3%	4.0%	0.7%	297	70.2%	29.2%	0.7%	295
	地方都市	94.6%	5.4%	0.0%	111	79.3%	19.8%	0.9%	111
	町村部	92.5%	7.5%	0.0%	93	70.3%	29.7%	0.0%	91
5.学習机	大都市	97.0%	2.7%	0.3%	298	42.6%	56.7%	0.7%	291
	地方都市	95.5%	4.5%	0.0%	110	45.7%	51.4%	2.9%	105
	町村部	96.8%	3.2%	0.0%	93	31.1%	68.9%	0.0%	90
6.応接セット	大都市	46.0%	49.1%	4.8%	291	29.0%	68.5%	2.4%	286
	地方都市	37.7%	52.8%	9.4%	106	26.7%	64.8%	8.6%	105
	町村部	44.6%	48.9%	6.5%	92	28.6%	70.3%	1.1%	91
7.ピアノ	大都市	53.3%	46.7%	0.0%	291	35.1%	64.9%	0.0%	288
	地方都市	41.5%	57.5%	0.9%	106	24.8%	75.2%	0.0%	105
	町村部	52.2%	47.8%	0.0%	92	25.0%	75.0%	0.0%	92
8.テレビ	大都市	100.0%	0.0%	0.0%	299	99.7%	0.3%	0.0%	298
	地方都市	99.1%	0.9%	0.0%	111	100.0%	0.0%	0.0%	111
	町村部	100.0%	0.0%	0.0%	93	100.0%	0.0%	0.0%	93
9.ラジオ	大都市	94.0%	5.7%	0.3%	298	65.5%	33.8%	0.7%	296
	地方都市	89.9%	6.4%	3.7%	109	60.0%	39.0%	1.0%	105
	町村部	94.6%	4.3%	1.1%	93	62.0%	38.0%	0.0%	92
10.ビデオデッキ	大都市	93.6%	6.0%	0.3%	298	79.5%	20.5%	0.0%	297
	地方都市	95.5%	3.6%	0.9%	111	80.0%	20.0%	0.0%	110
	町村部	95.7%	4.3%	0.0%	93	79.6%	20.4%	0.0%	93
11.冷蔵庫	大都市	100.0%	0.0%	0.0%	299	100.0%	0.0%	0.0%	298
	地方都市	100.0%	0.0%	0.0%	111	99.1%	0.9%	0.0%	111
	町村部	100.0%	0.0%	0.0%	93	100.0%	0.0%	0.0%	93
12.電子レンジ	大都市	95.6%	4.0%	0.3%	298	100.0%	0.0%	0.0%	298
	地方都市	94.5%	3.6%	1.8%	110	98.2%	1.8%	0.0%	110
	町村部	95.7%	4.3%	0.0%	93	98.9%	1.1%	0.0%	93
13.固定電話	大都市	99.7%	0.3%	0.0%	299	65.8%	34.2%	0.0%	295
	地方都市	99.1%	0.9%	0.0%	110	66.1%	33.0%	0.9%	109
	町村部	100.0%	0.0%	0.0%	93	63.0%	37.0%	0.0%	92
14.携帯電話・PHS	大都市	25.7%	74.0%	0.3%	288	99.3%	0.7%	0.0%	299
	地方都市	34.9%	64.2%	0.9%	106	98.2%	1.8%	0.0%	111
	町村部	17.6%	81.3%	1.1%	91	98.9%	1.1%	0.0%	93
15.カメラ	大都市	88.6%	10.7%	0.7%	298	99.0%	1.0%	0.0%	297
	地方都市	86.2%	13.8%	0.0%	109	91.0%	9.0%	0.0%	111
	町村部	91.3%	8.7%	0.0%	92	97.8%	2.2%	0.0%	93
16.文学全集・図鑑	大都市	65.9%	31.8%	2.4%	296	39.8%	59.5%	0.7%	289
	地方都市	62.6%	34.6%	2.8%	107	34.3%	63.8%	1.9%	105
	町村部	65.2%	34.8%	0.0%	92	34.1%	65.9%	0.0%	91
17.パソコン・ワープロ	大都市	42.4%	56.2%	1.4%	290	93.6%	6.4%	0.0%	296
	地方都市	46.2%	52.8%	0.9%	106	78.0%	22.0%	0.0%	109
	町村部	35.2%	64.8%	0.0%	91	94.6%	5.4%	0.0%	93
18.クーラー・エアコン	大都市	15.6%	84.4%	0.0%	289	38.8%	61.2%	0.0%	291
	地方都市	7.7%	92.3%	0.0%	104	29.5%	70.5%	0.0%	105
	町村部	26.4%	73.6%	0.0%	91	14.4%	85.6%	0.0%	90
19.乗用車	大都市	91.5%	8.5%	0.0%	295	93.6%	6.0%	0.3%	298
	地方都市	89.9%	10.1%	0.0%	109	97.3%	2.7%	0.0%	110
	町村部	92.5%	7.5%	0.0%	93	97.8%	2.2%	0.0%	93
20.美術品・骨董品	大都市	19.0%	79.3%	1.7%	290	9.3%	90.3%	0.3%	289
	地方都市	17.9%	80.2%	1.9%	106	3.9%	96.1%	0.0%	103
	町村部	23.1%	72.5%	4.4%	91	11.0%	87.9%	1.1%	91

表 4-2 蔵書数

		0冊	1～10冊	11～25冊	26～100冊	101～200冊	201～500冊	501冊以上	合計
15歳頃の頃	大都市	4.2%	20.3%	19.2%	38.5%	9.8%	5.6%	2.4%	286
	地方都市	5.6%	29.6%	24.1%	25.9%	8.3%	3.7%	2.8%	108
	町村部	2.4%	20.7%	24.4%	35.4%	9.8%	3.7%	3.7%	82
	合計	4.2%	22.5%	21.2%	35.1%	9.5%	4.8%	2.7%	476
現在の頃	大都市	1.8%	13.8%	17.4%	51.8%	8.5%	4.6%	2.1%	282
	地方都市	3.9%	27.2%	27.2%	30.1%	8.7%	1.9%	1.0%	103
	町村部	1.2%	11.1%	22.2%	53.1%	6.2%	2.5%	3.7%	81
	合計	2.1%	16.3%	20.4%	47.2%	8.2%	3.6%	2.1%	466

第2節 文化活動

表 4-3 は、保護者が 15 歳時と現在の文化活動の頻度をまとめたものである。なお、片岡栄美は 1995 年の SSM 調査をもとに文化威信スコアを算出している(片岡 1998:253)。ここでは「クラシック音楽のコンサートへ行く」=65.9、「美術館や博物館へ行く」=64.1、「小説や歴史の本を読む」=55.6、「スポーツをする (SSM ではゴルフ・スキー・テニスをする)」=52.1、「カラオケをする」=39.8、「スポーツ新聞や女性週刊誌を読む」=39.1 が与えられている。「図書館に行く」は、SSM 調査の調査項目にはない。

15 歳の頃の活動をみてみると、中学から高校にかけての時期であるためか、スポーツは週に 1 回以上おこなっていたものが多い。その中でも、町村部では 78.3 が週に 1 回以上スポーツをおこなっており、大都市の 67.0 や地方都市の 61.8 と比較して際立っている。また、町村部では、「美術館や博物館へ」行ったことがないという者が、大都市の 54.3、地方都市の 58.1 と比較して 44.8 と、10 ポイント程度低くなっている。他にも「図書館に行く」も週に 1 回以上が最も多く、「小説や歴史の本を」読んだことがない者は大都市の 20.4、地方都市の 31.2 に対して 9.1 と際立って少ないなど、読書習慣も根付いているようである。

現在に目を向けると、やはり町村部で「スポーツをする」や「図書館に行く」「小説や歴史の本を読む」などの活動が活発になされている。町村部における文化活動の活発さが強く出る結果となっている。

第3節 学校外教育と学歴期待

習い事やおけいごと、幼児教室など、学校外教育の利用については、3 歳児ということもあってか利用していない者が大都市で 42.8、地方都市で 56.8、町村部で 47.9 と多い。そのような中で、「スイミング・スクール」は大都市で 20.7、地方都市で 9.0、町村部で 17.0、「スポーツクラブ・体操教室」もそれぞれ 12.4、12.6、12.8 と、比較的多く利用されている。地域別では大都市において「通信教育」が 16.7 と、地方都市の 8.1、町村部の 9.6 と比較して多くなっている。学習面よりも、スポーツや芸術での活動が好まれている。

表 4-3 文化活動

		15歳の頃						現在					
		週に一回以上	月に一回以上	年に数回	数年に一度	したことがない	合計	週に一回以上	月に一回以上	年に数回	数年に一度	したことがない	合計
1.クラシック音楽のコンサートへ行く	大都市	0.0	1.7	7.3	19.0	72.0	289	0.0	.3	7.6	14.2	77.8	288
	地方都市	0.0	0.0	8.4	15.0	76.6	107	0.0	0.0	4.7	9.3	86.0	107
	町村部	0.0	1.1	15.9	14.8	68.2	88	0.0	0.0	1.2	3.6	95.2	84
2.美術館や博物館へ行く	大都市	0.0	1.0	10.6	34.1	54.3	293	0.0	1.0	14.8	27.6	56.6	297
	地方都市	0.0	0.0	4.8	37.1	58.1	105	0.0	1.0	9.6	28.8	60.6	104
	町村部	0.0	0.0	6.9	48.3	44.8	87	0.0	0.0	11.8	22.4	65.9	85
3.カラオケをする	大都市	9.8	23.6	32.7	6.7	27.3	297	0.0	5.0	32.9	22.5	39.6	298
	地方都市	19.3	19.3	32.1	5.5	23.9	109	.9	8.1	38.7	15.3	36.9	111
	町村部	10.9	18.5	29.3	9.8	31.5	92	1.1	7.9	43.8	14.6	32.6	89
4.スポーツをする	大都市	67.0	11.4	14.1	3.0	4.4	297	7.4	12.4	29.5	11.4	39.3	298
	地方都市	61.8	19.1	10.9	2.7	5.5	110	11.0	13.8	22.9	11.9	40.4	109
	町村部	78.3	8.7	6.5	2.2	4.3	92	30.3	16.9	23.6	11.2	18.0	89
5.図書館に行く	大都市	11.1	20.5	30.3	15.8	22.2	297	4.4	19.1	27.5	11.1	37.9	298
	地方都市	9.2	18.3	25.7	18.3	28.4	109	4.6	27.5	22.9	9.2	35.8	109
	町村部	15.7	27.0	24.7	10.1	22.5	89	13.6	27.3	29.5	3.4	26.1	88
6.スポーツ新聞や女性週刊誌を読む	大都市	6.8	12.2	9.5	7.1	64.5	296	6.1	22.4	29.2	8.8	33.6	295
	地方都市	9.2	15.6	6.4	10.1	58.7	109	12.1	21.5	24.3	5.6	36.4	107
	町村部	9.2	13.8	9.2	6.9	60.9	87	9.2	18.4	21.8	9.2	41.4	87
7.小説や歴史の本を読む	大都市	21.8	20.1	30.3	7.5	20.4	294	9.3	10.0	27.1	12.4	41.2	291
	地方都市	23.9	15.6	20.2	9.2	31.2	109	8.3	16.7	14.8	9.3	50.9	108
	町村部	22.7	28.4	26.1	13.6	9.1	88	10.1	14.6	29.2	13.5	32.6	89

表 4-5 では子どもに望む学歴をまとめている。これをみると、地域によってはっきりとした特色がみられる。大都市は高学歴志向が最も高く、大学まで望む者が 69.7 と 7 割近くを占めている。地方都市は 54.1、町村部は 50.5 であり、その高さは際立つ。

地方都市は、高等学校卒までを挙げる者が 18.9 と大都市の 6.4、町村部の 7.5 と比較して多い。一方、町村部では「特に希望はない」が 22.6 と、大都市の 9.1 や地方都市の 5.4 を大きく上回る結果となった。

表 4-4 学校外教育

		スイミング・スクール	スポーツクラブ・体操教室	バレエ・リトミック	楽器	幼児向け音楽教室	絵画教室	習字	英会話等語学教室	そろばん
あなただ	大都市	35.8	11.7	2.0	48.2	11.0	2.3	40.8	22.4	31.4
	地方都市	22.5	13.5	2.7	35.1	9.9	0.0	49.5	15.3	36.9
	町村部	27.7	14.9	5.3	44.7	17.0	6.4	53.2	20.2	33.0
	合計	31.3	12.7	2.8	44.6	11.9	2.6	45.0	20.4	32.9
お子さん	大都市	20.7	12.4	2.7	8.7	4.3	0.3	1.7	7.7	2.7
	地方都市	9.0	12.6	0.9	5.4	0.9	0.0	3.6	2.7	0.0
	町村部	17.0	12.8	3.2	13.8	0.0	1.1	2.1	6.4	1.1
	合計	17.5	12.5	2.4	8.9	2.8	0.4	2.2	6.3	1.8

		くもん	学習塾	児童館等	幼稚園受験塾	通信教育	その他	どれもしていない	合計
あなただ	大都市	12.4	29.8	6.4	0.0	25.1	4.0	7.4	299
	地方都市	10.8	30.6	2.7	0.0	20.7	8.1	9.0	111
	町村部	14.9	28.7	4.3	1.1	24.5	6.4	5.3	94
	合計	12.5	29.8	5.2	0.2	24.0	5.4	7.3	504
お子さん	大都市	4.3	3.0	1.3	0.0	16.7	3.0	42.8	299
	地方都市	2.7	0.9	5.4	0.0	8.1	3.6	56.8	111
	町村部	3.2	1.1	9.6	0.0	9.6	5.3	47.9	94
	合計	3.8	2.2	3.8	0.0	13.5	3.6	46.8	504

表 4-5 学歴期待

	高等学校	専門学校	高等専門学校	短大	大学	大学院	その他	特に希望はない	合計
大都市	6.4%	4.0%	2.0%	4.4%	69.7%	3.0%	1.3%	9.1%	297
地方都市	18.9%	9.9%	.9%	6.3%	54.1%	.9%	3.6%	5.4%	111
町村部	7.5%	6.5%	3.2%	5.4%	50.5%	2.2%	2.2%	22.6%	93
合計	9.4%	5.8%	2.0%	5.0%	62.7%	2.4%	2.0%	10.8%	501

第 4 節 保護者の到達階層

最後に、保護者の社会・経済的階層をまとめておく。職業については父親では事務的職業や技能工・生産工程に関する職業、専門・技術的職業が多く、母親では専門・技術的職業や事務的職業、サービスの職業が多い。ただ、母親では専業主婦が 39.6 と最多になっていた。父親をみると、工業都市である苫小牧市では、技能工・生産工程に関する職業が 35.2

と、大都市（14.7）、町村部（14.3）の倍以上となっている。また、町村部では農林水産的職業が8.8と、他地域よりも多かった。大都市では父母ともに専門・技術的職業の割合が高くなっていた。

学歴をみると、父母とも大都市、町村部の構成比はほとんど変わらない。地方都市では高等学校卒が父親で43.8、母親で40.9と、ともに大都市、町村部の倍近くになっていた。

個人年収は、専業主婦の多さを反映してか、いずれの地域も最頻値が「なし」であった。また、「なし」の次に多いカテゴリーも、パート労働を表すであろう「100万円未満」であり、大都市、町村部ではこの2カテゴリーで過半数となっている。世帯年収の最頻値はいずれの地域も400万円～500万円未満である。なお、平均世帯年収は大都市が570.2万円、地方都市が461.3万円、町村部が533.9万円であった。

表 4-6 職業

		事務的職業	保安的職業	販売的職業	関する職業 に関する職業	技能工・生産工程に 関する職業	運輸・通信的職業	専門・技術的職業	管理的職業	農林水産的職業	サービスの職業	その他	中 無職・産休中・育休	学生 (在学中)	合計
父 親	大都市	25.4	5.0	11.1	14.7	6.5	21.1	6.1	0.0	6.5	2.9	.7	0.0	279	
	地方都市	14.8	2.3	6.8	35.2	13.6	13.6	3.4	1.1	4.5	3.4	1.1	0.0	88	
	町村部	27.5	6.6	6.6	14.3	4.4	13.2	3.3	8.8	13.2	1.1	1.1	0.0	91	
	合計	23.8	4.8	9.4	18.6	7.4	18.1	5.0	2.0	7.4	2.6	.9	0.0	458	
母 親	大都市	19.2	0.0	3.4	0.0	0.0	24.2	.3	0.0	6.4	5.4	40.7	.3	297	
	地方都市	19.1	0.0	12.7	2.7	0.0	14.5	.9	1.8	10.0	7.3	30.9	0.0	110	
	町村部	17.2	1.1	4.3	1.1	0.0	14.0	1.1	2.2	9.7	3.2	46.2	0.0	93	
	合計	18.8	.2	5.6	.8	0.0	20.2	.6	.8	7.8	5.4	39.6	.2	500	

表 4-7 最終学歴

		中学校	高等学 校	専門学 校	高等専 門学校	短大	大学	大学院	その他	合計
父 親	大都市	3.9%	22.7%	11.0%	6.4%	3.5%	44.3%	7.8%	.4%	282
	地方都市	6.7%	43.8%	10.1%	4.5%	1.1%	27.0%	2.2%	4.5%	89
	町村部	1.1%	23.4%	14.9%	4.3%	4.3%	46.8%	4.3%	1.1%	94
	合計	3.9%	26.9%	11.6%	5.6%	3.2%	41.5%	6.0%	1.3%	465
母 親	大都市	2.0%	20.1%	20.8%	4.7%	25.2%	25.2%	1.7%	.3%	298
	地方都市	8.2%	40.9%	23.6%	8.2%	11.8%	6.4%	0.0%	.9%	110
	町村部	4.3%	20.2%	23.4%	8.5%	20.2%	22.3%	1.1%	0.0%	94
	合計	3.8%	24.7%	21.9%	6.2%	21.3%	20.5%	1.2%	.4%	502

表 4-8 年収

		なし	100万 円未 満	100～ 200万 円未 満	200～ 300万 円未 満	300～ 400万 円未 満	400～ 500万 円未 満	500～ 600万 円未 満	600～ 700万 円未 満	700～ 800万 円未 満	800～ 900万 円未 満	900～ 1000 万円 未満	1000 万円 以上	合 計
個 人	大都市	36.5	17.7	14.7	12.3	8.9	4.8	2.7	.7	1.0	0.0	0.0	.7	293
	地方都市	23.1	22.1	21.2	16.3	8.7	4.8	2.9	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	104
	町村部	38.5	24.2	13.2	7.7	5.5	5.5	4.4	0.0	0.0	1.1	0.0	0.0	91
	合計	34.0	19.9	15.8	12.3	8.2	4.9	3.1	.6	.6	.2	0.0	.4	488
世 帯	大都市	.3	.7	4.2	8.0	11.8	18.7	15.6	13.1	8.0	7.6	4.2	8.0	289
	地方都市	0.0	3.1	5.2	15.5	15.5	25.8	12.4	7.2	9.3	2.1	2.1	2.1	97
	町村部	0.0	1.1	5.7	9.2	8.0	23.0	19.5	13.8	6.9	4.6	2.3	5.7	87
	合計	.2	1.3	4.7	9.7	11.8	20.9	15.6	12.1	8.0	5.9	3.4	6.3	473

小括

本章の検討により、大都市と町村部の類似性と、地方都市の特殊性が浮き彫りとなった。全般に大都市や町村部は文化活動や学校外教育利用が活発であり、地方都市では他の2地点と比較してそれらが活発ではなかった。文化活動や学校外教育は、地域資源の影響を強く受けざるをえない。その点では、本調査で挙げたものについては、大都市部がもっとも資源には恵まれており、ついで地方都市、町村部となるはずである。しかし、現状としてはそれらの影響は少ないようであった。ここに、教育戦略のあり方や意識が表れていると考えられる。

本調査では15歳時の状況を詳細に聞いているが、15歳時に住んでいた場所は必ずしも現住地とは限らない。それを考慮したうえで大都市と町村部の類似性については考察を加えていく必要がある。

第V章 まとめ

本研究では、幼児の発達と保育観を中心に、3点比較を通してその地域差をみてきた。発達については、明確な地域差はあまり生じていない。しかし、保育観や生活状況については、主に町村部に特徴が見られた。また、家庭の文化的・社会的背景や学校外教育の利用をはじめとする文化活動に関しては、地方都市に特徴的な動きが見られた。

このことは、いくつかの問題の存在を示唆している。3歳時点での発達に明確な地域差は存在しない。そのようななかで保育観に差があるということは、子どもの今後の発達に影響を与える。また、ネットワークの地域差は、保護者が子育てに困難を感じた時の解決のあり方を変えるだろう。

文化活動については、地域資源の有無が直接地域差につながるというほど単純な構造を

とっていない。そのため経済的、社会的状況や子育てに関する意識が、家庭の文化のありかたに影響を与え、それが子どもたちへも伝わっていくことが想定される。

このことは、地域資源や家庭の経済的、社会的地位から保護者の保育観や家庭のあり方への影響、そして発達への影響へといたるパスの検討が重要となることを示している。今回見られた地域差が何に由来するのか、また、発達の差を説明できる変数はなんであるかを分析することが、北海道における幼児教育の課題を明確にすることにつながる。本報告では、各項目の単純なクロス集計結果の提示にとどまった。今後、より詳細な要因分析を通して、これらの課題を明らかにしていく必要がある。

参考文献

- ベネッセ教育総合研究所、2010、『第4回幼児の生活アンケート・国内調査報告書』。
- 片岡栄美、1998「文化弁別力と文化威信スコア」片岡栄美編『1995年SSM調査シリーズ18 文化と社会階層』1995年SSM調査委員会。
- 柏木恵子、1988『幼児期における自己の発達』東京大学出版。
- 厚生労働省、2015『21世紀出生児縦断調査』。
- 津守真・磯部景子、1965『乳幼児精神発達診断法3才から7才まで』大日本図書。
- ヴィゴツキー（柴田義松訳）、2002、『新 児童心理学講義』新読書社。